



古今  
奇談

伽百物語

二



明 徳 13  
1802  
2

今辰

而伽百物清卷之二目錄

岩崎村乃お摺 おろきむら おまけ 拾鉄九太夏可飲子ああり

宿世の縁 しゆくせ えん 延生水の年々奇蹟あり

短冊のめや たんさく めや 繋りとこあり

浪屋の扇風 なみの せんぷう 後よおとつる慮なき情

巻物七つが奇病 まきぶ しちつ かびょう 借小徳運七つ白濁あり

つゝ物あり

桶所の張乃井 おけ の はり の い 智たり 花女人と感あり



一とくははかり一は折る九多きは日移り日比の太く是  
 は折れ信女の手にとりしは又ハ巻子巻して形しこそ  
 とすつと取もけりうとす方人の目と驚きこそと心切なり  
 して是をも雲の敷子取りてすはるこの捨鉄は因舎人よそ  
 て初らり欄とこの人少少さけりて海に後りて後日紙  
 巻より紙取より申めも物取は言ひ揚さば好て標よ人の秘  
 巻しおとと取も標よは押取を巻ひ取しと官にる  
 よとるにらして大梅を細しとあせりとりと物りあるもの  
 ハ深く細きこをくかくりと声とさす事と僕あり  
 中丸を更り才一の好物とひきあさるい東玉少玉乃南人  
 更らる人又にお撲の針子にきて言あるものあこしり子又  
 日移り太鼓人のやんがは娘一やとるふのやんがはあ  
 一とこの好也一物取りよのい字像はよ入りてるもの

さて魁人とやのひ懸むとともなふ事と急字像といふにけり  
 而も惣髪の子あひ二人とのよむ事とあひ引つらひ一  
 けけのととりりちるる小見あり大下よりやんがは揚さ  
 らるるいとあつといりる髪玉の太玉は道なり人のおひま  
 受の上段とともとりて骨格なるか供人の徳一人ありも  
 いふ一とお思ひつはるは物や九を更りてともなふはひさ  
 ころう南玉乃お撲より捨鉄とらるるのありやとあせり九を  
 更りてと地は跪してあつたより捨しつらひあつた  
 けは形取士あつとととと二二町あり人あつた  
 密しとやとるるはひつらりとのよむあつて人あつた  
 ありけり一とくともお好物よ小勝く一くはあつた  
 甲よりあつたあつたあつたあ人のよむあつたあつたあ  
 くとるるあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ



の生熟を察せしもの罷りつゝも強くは官に事出つたの  
 くりは母の百年の命を縮むべく黄泉の世にむかへて  
 被殺す様一生の悲涙にけりららとの恐れとておぼり  
 とかくは母をむかひはまゐりするありやうをなまなく  
 せしゆとてまゝ命のより人を危しき所をけりゆら  
 く人ありゆらゆらとおもひやうをけりしゆらしてゆくは合  
 う様くあはれやうをゆらゆらとて文のゆらゆらとて九  
 十のよはせしもの様をゆらゆらとてゆらゆらとて  
 ちりり地ありゆらゆらとてゆらゆらとてゆらゆらとて  
 けりゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら  
 角とてゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら  
 ちりり大甲のむらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら  
 若者のゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら









つらなる御膳子にみ遊遊ゆきあゆみ入るる  
梅香をさき乃茶を立ちりては清き志のしりたけは  
うかひをふけを客途にせぬのまふおぼゆるさ  
宿工のえとらんを御師の麻印をさしてはひん  
史を人玉の翠の影ふうを横て立出に乃を客の  
はまにゆきあふさるをさるそのこすくゆる  
よらきさるをさるをさるをさるをさるをさる  
ゆきりあをさるをさるをさるをさるをさる  
清く人うこをさるをさるをさるをさるをさる  
とくさく梅香をさるをさるをさるをさるをさる  
あまをさるをさるをさるをさるをさるをさる  
あけてさるをさるをさるをさるをさるをさる  
あまをさるをさるをさるをさるをさるをさる

つらなる御膳子にみ遊遊ゆきあゆみ入るる  
あまをさるをさるをさるをさるをさるをさる  
ては清く人うこをさるをさるをさるをさるをさる  
あまをさるをさるをさるをさるをさるをさる  
ゆきりあをさるをさるをさるをさるをさるをさる  
あまをさるをさるをさるをさるをさるをさる  
あけてさるをさるをさるをさるをさるをさる  
あまをさるをさるをさるをさるをさるをさる



十  
三  
七  
六









空研境の陣よりうらに大寺の御音成り此れ初よりうら  
の寺より大念仏寺と号しそやの御音乃別とありて  
莊田のありたる本村開村に此の村の田井りて  
之村名の種と号し後乃前と知後之地あり此寺の  
傍より一人を製家と号しそやの御音成り此れ初より  
上人より親族と号しそやの御音成り此れ初より  
とひ一人よりそやの御音成り此れ初より  
宗のすいともち此の御音成り此れ初より  
は御音乃性とありそやの御音成り此れ初より  
指すむ製家と号しそやの御音成り此れ初より  
て、是の御音成り此れ初より  
此の御音成り此れ初より  
は是の御音成り此れ初より

寺より御音成り此れ初より  
とひ一人よりそやの御音成り此れ初より  
宗のすいともち此の御音成り此れ初より  
は御音乃性とありそやの御音成り此れ初より  
指すむ製家と号しそやの御音成り此れ初より  
て、是の御音成り此れ初より  
此の御音成り此れ初より  
は是の御音成り此れ初より







石初の意救元大熊を... 九字と切... 物又... 後... 声... 蘇乃... 遠出... 追... 毛...







想と初いほけと... 三年の月子報乃... 我の身を控ふる... ちる作子... 福て...



窓の戸を打ぬありやうして窓を閉りけりてをきこ  
そむとほりてそのおのゝ眼に日月とありては年の  
とれらうの據神のうらひをけりて意ありては作しぬとん  
て人の心とんて天井とほりて失ふりぬ物に乃ゆりたる  
ありては心ありては心ありては心ありては心ありては  
ありては心ありては心ありては心ありては心ありては

山何百知深を二終

